

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第168号

イザヤ 65:1

平成21年9月25日

ウツの地に、ヨブという名の人があった。この人は潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっていた……この人は東の人々の中で一番の富豪であった……ある日、神の子らが主の前に来て立ったとき、サタンも来てその中にいた……サタンは主に答えて言った。「ヨブはいたずらに神を恐れましょうか……あなたの手を伸べ、彼のすべての持ち物を打ってください。彼はきっと、あなたに向かってのろうに違いありません。」主はサタンに仰せられた。「では、彼のすべての持ち物をおまえの手に任せよう。ただ彼の身に手を伸ばしてはならない。」……使いがヨブのところに来て言った……みなさまは死なれました……このとき、ヨブは……言った。「私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」ヨブはこのようになっても罪を犯さず、神に愚痴をこぼさなかった……主はサタンに仰せられた。「おまえはわたしのしもべヨブに心を留めたか。彼のように潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっている者はひとりも地上にはいない。彼はなお、自分の誠実を堅く保っている。おまえは、わたしをそそのかして、何の理由もないのに彼を滅ぼそうとしたが。」サタンは主に答えて言った。「皮の代わりに皮をもってします……今あなたの手を伸べ、彼の骨と肉とを打ってください。彼はきっと、あなたをのろうに違いありません。」……サタンは……ヨブの足の裏から頭の頂まで、悪性の腫物で彼を打った。ヨブは……灰の中にすわった。すると彼の妻が彼に言った。「それでもなお、あなたは自分の誠実を堅く保つのですか。神をのろって死になさい。」……私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわざいをも受けなければならないではないか。」ヨブはこのようになっても、罪を犯すようなことを口にしなかった……三人の友は……慰めようと互いに打ち合わせて来た……七日七夜、地にすわっていたが、だれも一言も彼に話しかけなかった。彼の痛みがあまりにもひどいを見たからである。ヨブ記1-2章

神の御目に正しく生きていたヨブが霊肉ともにすべてにおいて祝福され、満たされ、ヨルダン川東岸一帯で当時一番の富豪であり、また、霊的指導者の第一人者であったという導入で、ヨブ記は始まります。ヨブの人生はまさに、「幸いなことよ……その人は、水路のそばに植わった木のようにだ。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしても栄える」(詩篇1:1-3)を地で行くような成功、祝福の日々でした。しかし、だれも予想だにしなかった恐ろしいことがヨブの家族、身辺に起こります。

道徳的、霊的に成熟し、神を心から恐れ敬っていたヨブにそのような突然の災いが降りかかった背後には、神の真のしもべヨブに対するサタンの理由のない、利己的な挑戦がありました。被造物の中で神に最初に反逆して以来、神に敵対する者となったサタン—地の周りを徘徊して人間をたぶらかそうと機会をねらっている「告発者」—は、まだこの時点では、天界にて神に仕える御使いたちに混じって、神の会議に連なることが許されていました。おそらく、地の人間たちの行状を監督する役割を与えられていたのかもしれませんが。しかしサタンは、神への忠誠心から仕事熱心、探究心旺盛であったわけではなく、畏におとしめ、神に訴え、自分と同じように失格者にさせるために、ヨブに近づいたのでした。神の御前で、「ヨブはいたずらに神を恐れましょうか」とサタンは、ヨブの信仰が本物ではなく、ただ物質の満たしがゆえに敬虔であるにすぎないと訴え、ヨブを攻撃し、すべての所有物を奪う許可を神から得たのでした。神ご自身が御前に正しく潔白な者は他にいないと断言されたヨブを告訴するという、サタンの傲慢で悪意に満ちた挑戦は、神ご自身への挑戦に他なりません。

神は、自分の理論を立証したいと主張するサタンに、ヨブ自身には手を下さないという条件の下、サタン自身のやり方で、ヨブの持ち物や回りの者たちを攻撃することを許されました。かくして、ヨブの上に突然、想像を絶する災いが振りかかり始めたのでした。神の恵み、祝福を計る当時の基準であった家畜、しもべ、息子、娘が次々に奪われ、ヨブがそれまで確信を持っていた神への信頼、神観が覆されるような過酷な事態に、ヨブは取りつくり間もなく追い込まれてゆくことになります。しかし、驚くべきことにヨブの信仰は、物資、所有物の剥奪や自分の子どもたちの死によってすら揺るがされるものとはならず、「私は裸で母の胎から出てきた。また、裸で私はかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな」と、むしろ神に対する忠誠、信頼が新たにされたのでした。この時点でサタンの最初の挑戦に対する敗北は明らかです。神がヨブを正しく見積もられたことが明らかになり、神の正しさがすでに立証されたのでした。

執念深い告発者、サタンは、また別の訴えを神の前に持ってきます。ヨブ記2章では、天の会議においてはすでにヨブは神ご自身の言葉によって正しさが立証されているのですが、このサタンと神との会話はヨブ自身には知ることが許されなかったことであつたために、ヨブの苦しみが始まることになります。なおも神に食い下が

ったサタンの言い分は、所有物や他人の身に起こることではなく、ヨブ自身の身体が打たれるなら、今度こそヨブは神を呪うであろうというものでした。商いが物々交換で行われていた当時、「**皮の代わりには皮を**」とは、同等のもので引き換えでなければ取引できないという意味でしたが、サタンは人を試みるには身体を打たなければ、正しく評価できないと主張したのです。そこで神は、ヨブの生命には絶対触れないことを条件に、ヨブの身体を攻撃すること、すなわち、死に至らない病、痛み、苦しみをもたらすことを許されたのです。

身体中を悪性の腫物でむしばまれたヨブの姿はもはやかつての、神の祝福を存分に受けた聖人のものではなく、あたかも神の懲らしめの下に置かれ、呪われた者であるかのような姿でした。ヨブがのた打ち回った「**死**」とは、町の周囲の外壁の外にしつらえられた当時のごみ捨て場で、動物の死骸から、糞、不用品、ゴミ一切が積み上げられ、定期的に焼却され灰の山となっていた場所のことでした。ヨブの居場所が町の外のゴミ捨て場しかなかったということに、イザヤが預言した「**苦難のしもべ**」イエス・キリスト像が重ね合わせられることに気づかれた方は多いのではないかと思います。ヘブル人への手紙の著者は、いけにえの動物は血を抜かれた後、宿営の外で焼かれることになっていると説明した後、「**ですから、イエスも、ご自分の血によって民を聖なるものとするために、門の外で苦しみを受けられました。ですから、私たちは、キリストのはずかしめを身に負って、宿営の外に出て、みもとにいかうではありませんか**」(ヘブル人 13: 12-13) と、キリストによる救いをもたらされた新約の時代、キリストに従う者は、もはや旧約の掟に従って、町の中で儀式を繰り返す宗教生活に明け暮れるのではなく、キリストによる罪からの解放「福音」を伝えるために、困難を覚悟で勇気を持って町の外へ出ていかなければならないことを奨励しましたが、まさに、ヨブは、「**苦難のしもべ**」のひな型として町の外で苦しんだのです。イエス・キリストが、ユダヤ人のメシヤであることをユダヤ人同胞から拒絶され、エルサレムの町の外のゴルゴダの丘で十字架の苦しみを受け亡くなられたように、かつては町一番の荣誉ある地位に就いていたヨブも今、同胞から見捨てられ、妻にも見捨てられようとしていたのです。

ヨブを襲った皮膚病は、ツアラアト、象皮病、悪性の慢性湿疹、乾癬、バラ色糝糠疹、角化症、^{ひこうしん}落葉状天疱瘡、ヒゼキヤ王の患った腫物等々の何れにも該当し、かゆみ、呼吸困難、悪臭、食欲不振、皮膚の硬化と黒ずみ、絶え間ない痛み、腫瘍の中のうじと膿、体重減少、腐れ落ちる歯、視野の衰え、熱、外観に現れる退化性の変形と与える不快感、悪夢、不眠、うつ状態が数カ月続いたのです。夫の信じられないほどの苦しみに、まず見るに見かねた妻が信仰を失い、背信を促す捨てぜりふを浴びせかけ去っていきます。しかし、ヨブの信仰は不動でした。サタンはかつてアダムを落とすためにまずエバを誘惑したように、ヨブを落とすために、妻を用いて神を呪わせようとしたのですが、不成功に終わったのです。むしろ、ヨブの、苦しみの最中にあっても、妻を戒める配慮ある言葉使いに、私たちは神が太鼓判を押されたヨブという人の練られた本性、神の前に正しく生きようとする姿勢をうかがい知ることができるのです。ヨブは「**あなたは愚かな女が言うようなことを言っている**」(下線付加) という表現を用いて、妻を非難せず、裁きは神に任せて、罪を犯すようなことは口にしなかったのです。この姿勢は、ヨブが最後まで貫いた真理の証し人にふさわしい信仰姿勢でした。

次に、ヨブの苦悶を聞きつけ憐れに思った三人の友人、エリファズ、ビルダデ、ツォファルが、ヨブを慰めようとはるばる遠方からやって来ます。エリファズは、死海の南、エドムの村テマン出身、ビルダデは、ケトラとの間に生まれたアブラハムの末の息子の名がシュアハであることから、おそらくシュアハの子孫、ツォファルは、モアブ王バラク父と同名ですが、ナアマ人であることからおそらくユダの町の人でした。三人はしかし、あまりにも変わり果てた哀れなヨブの姿に最初はヨブであることを見分けることができず、ただ絶句する以外、何もできなかったのです。慰めようのないヨブに対して、「**声をあげて泣き、おのおの、自分の上着を引き裂き、ちりを天に向かって投げ、自分の頭の上にまき散らし**」と、三人の悲しみ、嘆き、絶望の表現は、当時の葬式に参列する者たちの振る舞いと同じでした。「**一言も彼に話しかけ(ず)**」、ヨブのそばにただ黙ったまますわり、ヨブの痛みを自らの痛みとした七日間は、しかし、神が三人に与えられた最高の知恵で、ヨブにとっては最大の慰みとなったひとときでした。彼らの知識では、ヨブはまさに罪に呪われた者の姿で、当然の報いを受けている以外に考えられなかったのですが、それでも三人は心から同情し、ヨブの立場に立って苦しみをともにしたのです。しかし、ついに沈黙を破って、ヨブが心の嘆き悲しみを訴え始めたとき、3章以降で状況が急転します。サタンが、自分の正しさを立証するために、ヨブに対する背水の陣を敷いたからです。ヨブの妻を用いてヨブを落とすことに失敗したサタンの「**最期のとりで**」はヨブの三人の友でした。ヨブを愛し、高く評価しておられる神が、サタンにしたい放題のことをさせ、ヨブがこのような苦しみを通ることを許されたのは、サタンの挑戦に対する神の究極的な御計画、サタン退治を抜きに説明することはできません。悩み、痛み、苦しみは単に罪に対する懲らしめではなく、試練を通して、義人を鍛え、霊的な祝福を増し加えることが神の大きな御旨であることに加えて、ヨブを真理の証人としてサタンに敗北を認めさせるといふさらに大きな御目的があったことを、ヨブ記を読む者は見落としてはならないのです。しかしヨブ自身はそのことを何も知らされていませんでした。